

2014 年見学旅行事前学習資料・広島編 1～3

北海道北見柏陽高等学校 教諭 斉藤満幸

本校は例年 10 月末に広島への修学旅行を実施する。

その時、該当学年の地歴公民の教師が事前資料を作成し生徒へ配布する。今年が私が担当となったのでその内容を以下に記す。

「基本理念」は学年教師用にすでに作成配布したものであり、『新ヒロシマ・ノート 1～3』（20 号までの予定）は生徒 240 名＋教職員 60 名に 9 月以降に配布する予定のものである。

基本理念

1. 平和学習の意義

私は大学 2 年の時に、原水協主催の原水爆禁止世界大会へ大学学生代表として参加した。その後も授業や市民活動家として約 40 年あまり「平和学習」「平和活動」をおこなってきた。しかしその内容は実に「情緒的」であったとの反省に立っている。「多くの犠牲者が出てひどい、だから戦争は駄目だ。」というところに、過去の「平和学習」はほとんど集約されていた。

戦争のこわさを教えるのは大切だが、それだけでは不十分だ。

戦争には、独立戦争もあれば、民族解放戦争もあれば、独裁者打倒の戦争もある。アメリカ独立戦争はいけなかったのか、明治維新の戦争はいけなかったのかという問いにも答えなくてははいけない。

柏陽高校の場合どういう経緯で「広島」へ行くこととなったのかを私は知らない。だから今こそ「平和学習」の共通認識を持つべきである。

2. 視点に一貫性を

原爆のことでは「戦争の犠牲」をのみ教え、

加害者アメリカについてはふれていなかった。

日本は「東京大空襲」「ヒロシマ」で、数十万人の非戦闘員を亡くした。これは、ハーグ陸戦規定違反の「戦争犯罪」である①。日本は賠償請求権を持つが、将来の日本のため請求権を放棄した。この視点はしっかり伝えたい。

①ハーグ陸戦規定：「防守セサル都市、村落、住宅又ハ建物ハ、如何ナル手段ニ依ルモ、之ヲ攻撃又ハア砲撃スルコトヲ得ス。」

新ヒロシマ・ノート 1

2014.9. (木)

原爆を投下するまで 日本を降伏させるな①

8年前、見学旅行前に「ヒロシマ・ノート」という名前で事前資料を配付した。
今回は2度目。

8年前に中学校の教科書で「原爆」の記述を確認した。
以下のようにになっていた。

アメリカは戦後の世界でソ連より優位に立つためもあって、8月6日広島、8月9日長崎に、原爆を投下した。死者は被爆後の死者も含め、広島20万人以上、長崎が10万人以上におよび、街は廃墟となった。

(『中学社会・歴史』P207 教育出版)

※アンダーライン 引用者斉藤

ポイントは

アメリカは戦後の世界でソ連より優位に立つためもあって

である。

今年知り合いの中学社会科教師に教科書を借りてその箇所を確認した。

すると、教科書会社が変わり以下のようにになっていた。目が点となった。

ポツダムの会議では、アメリカ・イギリス・中国の名前で日本の無条件降伏をうながす共同声明を出しました(ポツダム宣言)。しかし、この宣言を日本が黙殺したため、戦争の早期終結を望むアメリカは、8月6日に広島に、8月9日に長崎に原子爆弾を投下しました。

(『中学生の歴史 P213 帝国書院』)

※アンダーライン 引用者斉藤

なんと、原爆投下の理由が

日本が黙殺したため

になっていた。



(ポツダム会談 チャーチル・トルーマン・スターリン)

明らかに意味が違ってくる。
前者は

アメリカの戦略により使われた原爆

後者だと

日本が黙殺したために使われた原爆

さて、真実はどちらか？これは、先の戦争をとらえる重要事項のひとつである。

もう少し、資料を提示する。

我が校で使っている教科書『高校詳説日本史 B』の記述は「ポツダム宣言に対して、黙殺すると評した日本政府の対応を拒絶と理解した」

(『詳説日本史 B』P368 山川出版)

となっている。

ところが、別の高校教科書を調べると原爆投下の記述が違っていた。

以下「清水書院」の記述。

日本政府は国体護持(天皇制の維持)の保証がないとして、ポツダム宣言を黙殺した P238

実は、この時日本は戦争終結を進めていた。その時ゆずれないのが「天皇制の維持」の保証であった。くわしい話は次号に。

決定的なのは教科書「桐山書店」の記述だ。

原子爆弾の開発に成功したアメリカは、戦後の国際社会での優位を確立するためにもソ連参戦の前に戦争を終わらせようと、原爆を投下したといわれる。 P199

続く

新ヒロシマ・ノート 2

2014.9. (木)

原爆を投下するまで
日本を降伏させるな②

高校教科書「清水書院」の記述を再度のせる。

日本政府は国体護持（天皇制の維持）の保証がないとして、ポツダム宣言を黙殺した。P238

黙殺とは「広辞苑」によると「あるものを無いもののように扱うこと。」となる。

当時日本指導者の最大の関心事は「天皇制の維持」にあった。そのことはアメリカも知っていた。天皇自身は最高戦争指導会議で戦争終結の意志を伝えている①。この時点でアメリカと「天皇制の維持」の約束ができれば、終戦である。

ところが、日本に降伏を要求してきたポツダム宣言には「天皇制の維持」の文言がなかった。厳密に言うところ

途中で削除された

のである。

アメリカのトルーマン大統領は、日本政府が強く望んでいた「天皇制の維持」をポツダム宣言に入れる案をつくっていた。草案づくりはルー国務次官、スティムソン陸軍長官。

ところが、ポツダム会談中の7月21日、アメリカが原爆実験に成功した。24日、トルーマンのもとに「原爆投下が可能」との連絡が入る。そして、その時トルーマンの判断で、

天皇制維持の「約束」は削られたのである。

よって、時の鈴木総理大臣が記者団との会見で「この宣言は重視する要なきものと思う。と答弁し、新聞報道で「黙殺」という言葉が使われた②。」

日本政府はどうしてそこまで「天皇」に拘ったのか。少し調べてみた。

1 戦後、アメリカの上院では「天皇を戦争犯罪人として処罰する」ことを全会一致で決めた。ところが、日本占領の最高責任者マッカーサーは「天皇を戦争犯罪人として裁判にふせば、日本全国に暴動がおこる③。」と判断し、上院の決定を拒否している。

ダグラス・マッカーサー



2 戦後日本を占領したGHQの最大の方針は軍部解体でもなく、新憲法の制定でもない。

日本人の精神を骨抜きにする

ことにあった。

それは、教育と報道で徹底的に行われた。これを War Guilt Information Program（日本人に戦争犯罪の意識を刷り込む情報宣伝計画）という。

このなかで、原爆による民間人大量殺戮という「戦争犯罪」を帳消しにするため、日本軍の侵略を誇張することに全力をそそいだ。歴史界ではそういう解釈も成立している。

そして、そのなかに「天皇の神格性や愛国心に対する擁護が厳禁④」されたのである。

3 明治天皇の玄孫竹田恒久氏（慶応大憲法学講師）がいうには「現存する国家のなかで世界最古の国家は日本である。（引用者中略）今上天皇（現在の天皇陛下）は第125代目⑤）になるという。

4 台湾の評論家黄文雄氏によると、天皇に対する世界からの尊敬は日本人が考える以上のものがあるようだ。昭和天皇が亡くなった時は、「世界164か国の元首相や弔問使節が参列し、そのレベルは史上例のないもの⑥」であったという。「アメリカ大統領のホワイトタイ・ディナー（大統領が最上級儀礼を示す）でもてなすのは、英国女王、ローマ法王、天皇陛下だけである⑦」という。

続く

①『敗戦前後の日本人』保坂正康著

②『黙殺・上』仲晃著

③『日本が二度と立ち上がれないようにアメリカが占領期におこなったこと』高橋史朗著

④『この国のけじめ』藤原正彦著

⑤『旧皇族が語る天皇の日本史』竹田恒久著

⑥『世界が憧れる 天皇のいる日本』黄文雄著

⑦ 同上

新ヒロシマ・ノート 3

2014.9. (木)

原爆を投下するまで
日本を降伏させるな③

第3号では、高校教科書「桐山書店」の以下の記述の意味を考える。

原子爆弾の開発に成功したアメリカは、戦後の国際社会での優位を確立するためにもソ連参戦の前に戦争を終わらせようと、原爆を投下したといわれる。 P199

1945年に入り、日本の敗戦が濃くなってきた2月、ソ連のクリミヤ半島の保養地ヤルタで会談を開く。この時の出席者は、アメリカ・ルーズベルト大統領、ソ連・スターリン首相、イギリス・チャーチル首相。

ここで、アメリカとソ連は世に名高い「ヤルタ密約」を結ぶ。

その内容は、

ソ連が日本に参戦すること（日ソ中立条約違反）

当時、日ソ間には中立条約が結ばれていた。日ソ間は「相互不可侵」、つまり戦争はしないという約束である。しかし、それはヤルタ密約によって破られた。明らかに条約違反である。

しかし、敗戦濃厚となった日本政府は、中立条約を信じソ連に和平の斡旋を展開する。

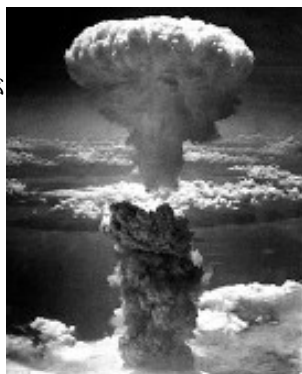
1944.9.16 に中ソ大使佐藤尚武は、外務首脳の前でモロトフに会い、両国間の討議を申し出る。しかし、相手にされない。

当然である、そこには「ヤルタ密約」があった。

そして、その2カ月後にルーズベルトが急死。副大統領だった「トルーマン」が大統領となった。

「そしてポツダム会談が始まるが、その前日に原爆実験が成功する。そして直ちにポツダムのトルーマン大統領に伝えられた①。」

それを知ったトルーマンはソ連の対日参戦期日



を聞きだすことにエネルギーをかけたのだ。

何故か？ 簡潔に言うと、「ソ連が参戦する前に日本を降伏させてしまわなければならなかった②」からである。

ソ連が参戦して、日本が降伏することを恐れていたのである。

おかしな話である。
柏陽高校2年生に聞く。

なぜ、アメリカは日本の降伏を恐れていたのか。

キーワードは高校教科書「桐山書店」の記述にある。そこにはこう書いてある。

アメリカは、戦後の国際社会での優位を確立するためにもソ連参戦の前に戦争を終わらせようと、原爆を投下したといわれる。

この3行はものすごく意味が深いのである。アメリカはソ連が参戦すれば日本は降伏するとの確信があった。

しかし、「ソ連の対日参戦」という切り札を回避して、「原爆の投下」というカードを切った。その結果が無抵抗の30万人以上の被害者である。これは国際法違反なのである③。

原爆投下の後の声明で、トルーマン大統領はこう述べた。「我々は歴史上最も重大な科学上のギャンブルに20億ドルも費やしてきた。そして我々は成功した④」。

この言葉を忘れずに広島へは行くべきだろう。

※ とりあえず3号まで書いた。問題提起のつもりで書いている。よって感想や疑問を以下に連絡してほしい。名前があっても匿名でもいい。そのままこの通信に載せる。

一方通行にはしたくない。 saito@t-abashiri.com
続く

①『開戦と終戦』五百旗頭真・北岡伸一編

②『原爆を投下するまで日本を降伏させるな』
鳥居民著

③ハーグ陸戦規定：「防守セサル都市、村落、住宅
又ハ建物ハ、如何ナル手段ニ依ルモ、之ヲ攻撃
又ハ砲撃スルコトヲ得ス。」

④朝日新聞社説 2006.8.6日付